

すぐに悟ったか、貴璃子が腰を浮かせる。だが、そのおかげで脱がせやすくなった。つるりと皮を剥くように、薄布を腿の半ばまで一気に引きさげる。そうして剥きだしになったヒップを、再び抱き寄せた。

「やあん」

貴璃子が切なげな悲鳴をあげたときには、なにも覆うもののなくなった尻割れに、由紀生の鼻がめりこんでいた。むわっと、濃厚な淫臭が脳を直撃する。

（こんな、ああ……）

声にならない感動。ペニスがビクンと脈打つ。

「バカあ、もう——」

ベソかき声でなじり、貴璃子はペニスにむしゃぶりついた。羞恥をフェラチオに没頭することで誤魔化そうとしているのか。開き直ったふうに、少年の顔面に体重をかけてくる。あるいは密着させることで、その部分を見られまいとしていたのかもしれない。

頬に触れるお尻の感触は、筆舌に尽くしがたい。ぶにぶにした弾力となめらかな肌との融合は、まさに天国の心地。谷間にこもる、ツンと刺激的な汗の香りも好ましい。そして、唇に触れるじつとりと濡れそぼったもの。磯臭^{いそ}くて、ヌルヌルと形のつか

めないものは、まぎれもなく少女の性器。

由紀生はためらいもなく吸いつき、わずかなはみだしにこびりついたヌメリを舐めとった。

「ん——」

貴璃子のヒップが切なげにわななく。感じているのだとわかり、舌を陰裂に割りこませ、大胆に蠢かす。

「んふううう！」

肉茎が強く吸われ、尿道に溜まっていたカウパー腺液がトロツと溢れる。太腿と、お尻のわれめが、顔を強く挟みつけてくる。

煽られるように、由紀生は処女の淫華を音がたつほど舌で掻きまわした。溢れくる恥蜜も、喉を鳴らしてすする。

チュウ、ちゅばっ、にゅちゅる——。

「んっ、んふ、んはあッ！」

とうとう堪えきれなくなったらしく、貴璃子がペニスを吐きだした。われめがきゅむきゅむと収縮し、甘じよっぱい愛液が舌に絡みつく。

粘つくそれをたっぷりとまとわりつかせて、由紀生はちひろ先生に教えられた『女



の子のいちばん気持ちいい部分』を探った。

「あ、あつ、そこお」

貴璃子の尻肉がキュツと締まる。クリトリスをとらえたとわかり、そこを重点的に攻める。お尻や太腿を、手のひらで熱心に撫でまわしながら。

「だめ、だめ……そんな——」

屹^{きつりつ}立の根元にしがみついて、優等生の少女はひたすら喘ぎをこぼした。腰から腿にかけての痙攣^{けいれん}が、断続的なものになる。

（すごい、いやらしい……）

こんな感じるといふことは、やはり彼女も自分でさわって、気持ちよくなることがあるのだろう。ということとは、絶頂も経験しているのか。

考えたら、最後の瞬間を見届けたくなった。舌先で包皮を剥き、隠れていた花の芽を転がす。

「ああああ、いや！——」

わななきが爆発的なものになった。今にも壊れそうに全身を暴れさせる。

「いや、ダメ——え、んんんッ」

拒絶の言葉を吐きながらも、もつとしてというふう淫核を押しつけてくる。もう

すぐイクに違いないと、さっきよりも尖^{とが}つてきた感のあるクリトリスを唇で挟み、吸いながら舌先でくすぐる。

「あう、いく、イッチャう」

泣きそうな声をあげ、貴璃子はペニスにむしゃぶりついた。強烈なバキュームを施し、口からはみだしたところを狂ったようにしごく。

それにより、由紀生も頂上に走った。事前に充分高められていたせいもあるのだろう、唐突と言っていいオルガスムスであった。

「ンふっ！」

くぐもった呻きをもらし、精液ミサイルを勢いよくほとばしらせた瞬間、貴璃子の肉体も激しい痙攣^{けいれん}に見舞われた。少年の上で、ガクガクと全身を波打たせる。

「んっ、うッ、ンううううう——」

尻底の筋肉が由紀生の顔面を強烈に締めつける。射精する肉根が吸いたてられ、あらかじめ予定された以上のザーメンが誘導されるようであった。

「んッ、んんッ、ふ——」

貴璃子のせわしない息づかい。ペニスを突き立てられた口内が、何度も収縮する。コクコクと喉が鳴るのも聞こえた気がした。